

飼い主の心を開き、 目の前の小さな命に全力を注ぐ 真のホームドクター



Urban Animal Hospital
アーバン動物病院

Doctor
松下光浩

「私は、むやみな対症療法はしません。点滴や解熱剤などを安易に使用して症状を抑えてしまうと根本の原因が見えづらくなることがありますから」と、松下光浩獣医師。まずは飼い主から正確な情報を得ることだという。ある夏の日、高熱の犬を連れて来て「部屋は涼しくしていた」と言う飼い主に、「では何度に温度設定を？」と改めて聞き直しエアコンを付けていなかったと判明した事も。飼い主が話しやすいような空気づくりや、正確な情報を聞き出す工夫の重要性を指摘する。

「飼い主さんは昨日まで食べていたと言うけれど、触るとガリガリに痩せかけていたり、とても危ない状態なのに、内服薬だけもらって連れ帰ろうとする飼い主さんも」。動物の変化、特に猫は犬ほど体調の変化をストレートに表現せず、長毛種ならば体重の変化も付きにくい。飼い主が異常に気付いたときは、既に病気がかなり進行していることも。小さな徴候も見過ごせば命取りになりかねない。「一刻を争う状態か、あるいは一日様子を見ても大丈夫か、数値だけでなく培った経験や知識も総動員して判断します」と松下さん。その上で「咳が酷く肺水腫を起している高齢犬や、ひどい貧血の猫など、命に関わる状態である場合、その事を飼い主さんに理解して頂くことが重要」だという。



院内は松下さんの気さくな人柄が醸し出す心地よい空間だ

「とにかくにも、松下さんの思いは1つ。目の前にいる、小さな命を大切にしたいという事。その思いが、言葉の端々から、にじみ出てくる。「かんかん照りの中、散歩させてたりする人がいたら、つい黙っていられなくて声をかけちゃいますよ、肉球が焼けちゃいますよ、可哀想ですよって」でも、飼い主の価値観を一番に尊重する姿勢は揺るがない。プロの獣医師だ。